

イギリスにおけるマキアヴェリズムの系譜

——ボーリングブルックの場合——

柴 山 英 一

【要約】 周知の如く一七世紀末から一八世紀前半にいたる約一世紀のイギリスは、フランスを圧倒して政治経済的に上昇しつつあった一面、かなり動揺しつつあった時代であり、緊張した点で恰もメデイチ家のロレンツォ時代を連想させる観があったが、この間におけるイギリスの政治家ボーリングブルックの政治論なり政治的行動は節操あるが如く無きが如くで、そのレアリズムに徹した点は正にマキアヴェリと軌を一にする趣きがあるやに思われる。本稿においては彼が単にマキアヴェリの弟子たる立場のみでなく時として必ずしもマキアヴェリに追随せず、認識と実践に立脚して一種哲学者的風格を持し、むしろ独自の立場をとった便宜的マキアヴェリストであったか否か、両者の類似性と相違点や、一種ユートピア的傾向さえ見られるマキアヴェリと彼との似て非なる局面をも併せて比較検討してみたい。

史料 四八巻五号 一九六五年九月

まえがき

マキアヴェリズムはフロイド流の精神分析学の対象になり得るが、拙稿においてはマキアヴェリの思想を一八世紀の著名な政治家の一人であるボーリングブルック(Henry St. John 1st Viscount Bolingbroke, 1678-1751)がどのように受けとめ実践したかを、とくにその論著 The Idea of a Patriot King の所論を紹介し

つつ、一八世紀イギリス政治史の展開を背景に批判的に採り上げてみたい。彼が文字通りマキアヴェリ(Machiavelli)の遵奉者であったか否か問題であり、また国籍の相違なり時代の距離が認められるとしても、少くとも彼の思想体系のなかにマキアヴェリ的要素が大きな比重を占めたことは否定できないと思う。このような点を追求することによって、似て非なる一面があるとしても彼も亦結局マキアヴェリの重流であるとの断定を下してみたい。

なおポーリングブルックについては、かつて千代田博士が主として史学史の視点からすぐれた論稿を発表され、マキアヴェリにも少しく触れておられるが、拙論においてはもっぱら両者の比較という角度に論点を絞って進めることにしたい。

① 千代田謙「ポーリングブルック子と史学説」『史林』第二十一巻 第四号、昭和十一年、一—三八頁。

一 ポーリングブルックはマキアヴェリの弟子か

ケンブリッジ大学の近世史のバタールフィールド教授 (Prof. Butterfield) はイギリス啓蒙史学の先達といわれたポーリングブルックを指して、イギリスにおけるマキアヴェリの高弟の一人であり、とくにその論著『The Idea of a Patriot King, 1738』はマキアヴェリの『君主論』(Il Principe) を反射的に意識して書いた相似形の名作であるとし、その理由は Patriot King が単なる一篇の文芸作品ではなく、それは正にイギリス史研究者間の神話であり、十分に再検討する価値を有するものであるから云々と述べているが、恐らくポーリングブルックこそ一八世紀のイギリスにおけるマキアヴェリ主義の系譜中、第一人者たるにふさわしい人物であろう。

かくしても我々がポーリングブルックその人に着眼するならばマキアヴェリ自身がたしかに近世イギリスの政治的局面の展開に深い関連のあることを見出すことができるであろう。勿論たとえばポーリングブルック自身の誇張のきらいのある一種通俗的な政治的著作はマキアヴェリの光彩ある大胆な論説とは比較にならないと思われるが、それはともかく当面の課題は純然たるマキアヴェリの影響を示す驚くべき特例の追求である。かくすることに よって結局マキアヴェリの暗示に富んだ含蓄ある教訓を引き出すのに役立つであろうし、また拙文の論旨を展開する所以ともなり、なおまたポーリングブルックを凡ゆる角度から分析することは必ずしも本論の直接の目標ではないが、而も実はつぎのことを心に留めておく必要がある。即ち彼は反ホイッグのリーダー格で、後に首相としてホイッグ党の責任内閣制度をはじめたウォールポール伯爵 (Walpole, Sir Robert, Earl of Oxford) の政敵でもあり、王権神授説に批判なり侮蔑を集中し、かつての同志ジェームス (James) 党員に対する痛烈な非難の機会は絶対に逃さなかった文筆家でも、また時として哲学的ポーズをもったという事実である。而してもし彼がマキアヴェリの弟子であるとすれば、勿論彼はその師匠よりも二世紀以上も後に出て著作し、イギリス人としての精神的立場からマキアヴェリその人に接近したことを想

起せねばなるまい。かくして恐らく彼はマキアヴェリの思想の若干の部分に心を惹かれ、マキアヴェリの本質をとらえたものと考えられるのであって、単なる弟子としてのみならず時にむしろ反対の立場をとる評論家でもあった点に大いに興味を覚えるのである。たとえば『クラフマン』(Craftman)誌のなかにはマキアヴェリに關する多くのお世辞抜き卒直な彼の見解が述べられている。即ちマキアヴェリの名は久しい間政治学上の無遠慮と同義語であつたと指摘し、さらに出版の自由という問題に言及して、有害な政治家達は或る事柄を排除撤廃しようとして決意した場合でも、決してそのような気配を見せないが、このことは実は彼等の大先輩のマキアヴェリによって最初に教えられたレッスンである云々^③。而も亦彼はその Remarks on the History of England, 1730のなかで、政治家達が蔵書中に是非マキアヴェリの諸著作を加えることを要望し、それ等のなかには諸偽経書と同様、たとえば『ローマ史論』(Discorsi)の如く活用に価する事実が随所に配置記述せられてゐる点を指摘してゐる^④。

① Herbert Butterfield, *The Statecraft of Machiavelli*, 1955, p. 11.

② *ibid.*, p. 135.

③ Craftman, No. 2.

④ H. Butterfield, *op. cit.*, p. 136.

二 史的特例の適用という命題をめぐって

周知の如く一八世紀の啓蒙主義時代にはマキアヴェリの書は悪魔の書として忌避されたが、そのような時代にマキアヴェリを例証するにはむしろ蛮勇が必要であることをポーリングブルック自身十分に心得ていたかに推測されるわけで、而も彼の諸論著中に含まれる真意なり狙いは、彼自身としてはたとえ一般の共感を得ても得られなくても、それは論外としてマキアヴェリ以上に引用され得る著作者は他に見られないことを力説したかつてのそれはあるまいか。というのは彼自身マキアヴェリからの剽窃盗作でない場合でさえも、心中たえずマキアヴェリズムが磁石のように潜在し作用しつつあるかに見えるからである。なお彼はその著作時代に一種不可知論的立場をとり、恰も哲学者の風格を示したことを想起する必要がある、従つて一方では彼を当代における反ウォルポール派的パンフレット作家と見做し得るとしても、とくに前述の The Idea of a Patriot King の如きは少くとも哲学的予見のもとに後世の批判を狙つて書かれた快心の作であつたと思われる。小粒ではあつたがイギリス啓蒙史学の代表的人物であつた彼の『歴史学修論』(Letters on the Study and Use of History)^①こそは正に彼の政治史観なり史的思想の結晶であるが、そのなか

には『ローマ史論』に関する注釈論評もある。なお彼には時としてマキアヴェリの政治思想の投影と見られるような模倣的要素と逆の要素とが併存するが、歴史研究への動機については歴史学者たるマキアヴェリ同様、読史的立場と修史的立場とに分類して単に趣味や娯楽のために歴史への研究に赴く人々の誤謬を模倣しないように警告し、而も勿論ポーリングブルックは啓蒙主義の歴史哲學的新史学という史学史的必然性に立脚して、マキアヴェリとはまた異った迫力をもって歴史研究こそは凡ゆる研究のなかで我々を公的或いは私的道德の場に在って鍛練するのにもっとも適切なものと思われると力説し、さらに彼自身歴史研究のお陰を蒙っていることを認めてはいるが、過大な効果を歴史研究に期待して世の嘲笑を買うことは不快であると訴えている。彼に従えば歴史とは実例によって静思する行動の人生哲学であり、それが直接現在に関連する場合とくに重要であるとし、このような具体例の重要性について縷々論述する。即ち我々は眼を世界に注ぐことによって日々実例の威力を眼前に見るであらうし、また眼を内心へ向けるならば、何故に実例が威力を持ち得るかを発見するであろうと歴史学的な発言をしている。またたとえ抽象的或いは一般的命題なり主張が真実であっても、それ等が実例によって解明実証されるまでは当然我々に疑惑を懐かせるものであり、実例が我々に

提示される場合そこには我々の単なる理解以上にむしろ一種我々の悟性なり感覚或いは思索への引力が作用し、その引力が我々を全く満足させてしまふであらうし、やがて、そのような諸実例の想起が習慣づけられるであらうというのである。実はポーリングブルックが歴史上の実例に独得の重要性があると指摘する理由は、結局展開するそれら等諸実例のなかで我々は全体の歴史的経過が一応完結したことを知り得るし、また整理された史料文獻の操作により謂わばその歴史事実に関する完全な統一体を通じて事件の連続的な動きなり経過を観察できるから、事件の結末に対する妥当な判断を下し得るとするのであるが、而も彼はこの場合でもマキアヴェリのような誤謬を犯してはならないと警告してやまないのである。^④

彼はまた歴史とは公的或いは私的生活のなかに在って、我々自身のように行動するかを実例によって教える哲学であり、それ故に我々は哲學的精神なり方法で歴史に専念し、また特殊な知識を一般的知識にまで上昇すべきであると主張する。さらに特例は文字通りしばしば特種な場合に役立ち得るけれども、その適用は危険を伴いがちであるから常に留意し極度の慎重が必要であり、さもなければ恐らく成功は稀である。而も人々は常にこの特例の適用という命題が歴史記述の主要な効用であったと考えがちであ

るが、マキアヴェリ自身果してこの点完全無欠であったか疑問であり、彼はむしろ特例を余りにも適用すぎた観があるとし、たとえば彼は『ローマ史論』のなかで、かつてマリウス (Marius) とカッルス (Catulus) がアルプスを越えてキムブリ (Cimbri) と遭遇し、イタリア国境の彼方に撃退した事実のあることを論拠として、一民族が他民族に侵入されようとする場合は常に国境からはるか遠隔の地で迎え撃つべきであるとするのは果して安全というべきであろうかと反論し、さらにこの点グイッチアルディーニ (Guicciardini) なら前例の適用から起り得る危険性を熟知していたとつぎのように論評しているのである。即ちたとえばスフォルツァ (Sforza) 家のロドヴィコ (Lodovico) がまずフランス軍を招致することによって戦禍がイタリアに始まった時に、メディチ家のピエトロ (Pietro) 自身も一大苦難に包まれたが、このピエトロの危急はその父ロレンツォ (Lorenzo) の特例を模倣することによって自らを救済しようとしたことから生じたのであって、この点についてグイッチアルディーニの観察によれば、特例によって自己を支配することが如何に危険なものであるかを警告し、その理由として前例と同様に成功するためには同様の慎重さと幸運に恵まれることが必要であり、なおまた先例というものは一般に目前の問題のみならず、凡ゆるデリケートな状況下なり事件の

場合に対しても解答を与えねばならぬ故に危険である云々と述べている。^⑥

① 千代田謙「ボリングブルック子と史学説」、『史林』第二十一巻第四号、昭和十一年、七七八頁。

② H. Butterfield, op. cit., pp. 137-8.

③ J. R. Hale, England and the Italian Renaissance, 1948, p. 45.

④ Bolingbroke, Letter IV.

⑤ Machiavelli Gesammelte Schriften, Bd. I, S. 208.

⑥ H. Butterfield, op. cit., pp. 139-40.

三 とくに古代史および十五世紀末葉に 対する見解

ボリングブルックはマキアヴェリを修正するために、彼と同時代の批評家で且つマキヴェリに類似した思想の持主であるボアロウ (Boileau)^①の見解を援用して、つぎのように主張する。即ちたとえば古典作家を一字一句忠実に近代語に翻訳することは愚の骨頂であり、よき訳著者は原著原文の意味なり精神を自己の著作中に浸透させるであろうし、もし彼が古代作家と同じ表現を用いたとしても、それは結局彼がそのように記すべく努力した自らの結果に外ならないのであって、このような態度こそ我々が歴史上の諸実例を取扱うべき姿勢である。而してもし可能ならそれ

等の精神を理解すべきであり、愚かにも偉大人々の行為を我々の行為のうちに變形具現することを敢えてしてはならないが、この点我々はやもすればこれ等の実例を等価物にとり換え模倣しがちであると指摘する。^②さらにボリーニングブルックはマキアヴェリが古代史とくにローマ史を尊重したのとは逆に、古代史が研究上もっとも適切であるとする見解を批判してつぎのように述べる。即ち私自身も古代史を記述して来たが、古代史というものは結局凡ての理性ある人々の研究目的に応えるには極めて不適切である。何故ならば古代史は断じて如何なる合理的な人達の十分な信頼を勝ち得ないであろう。従つてもし私の主張に沿い、古代の沈滞した伝統から下り、もっと近代のより確実な歴史は勿論、歴史をより全体として現代へと下ることが可能であるなら、私のこれまでの労苦はいとわなないであろう。^③

また彼は、とくに十五世紀末葉が何故に一つの類かしい史的スタートであり得るかについて解説し、この時期はマキアヴェリの古代史への考察より遙かに価値豊かなプロセスであったとつぎのように論評指摘しているが、その論旨は歴史哲学めていて具体的に乏しい憾みがあるとしても、ともかくもマキアヴェリと同様に一種政治的歴史的金言を提供している点で興味を覚える次第である。即ちたとえば諸事件というものは本来その政治的展開の過程にお

いて相互に緊密に連結せられており、相つぐおびただしい出来事は先発の事件に関連依存するとはいへ、全体の関連性は恰も鎖を長く伸ばすように先端へ行くほど次第に小さく、遂には接続なり脈絡は途切れがちになつたかに見え、而もそこに一つの新たな事態或いは関係を生ぜしめるのであって、新しい利害関係が新たな格言なり行動の新方式を生ぜしめ、それは順次より新たな方法なり慣習を発生せしめる。而してこのような新事態なり期間が永続する程差異は増大するであろうし、勿論このような期間の前後に若干の類似性は遺るであろうが、そのような後遺性はもはや有益な研究対象というよりは単なる物珍らしきの対象にすらなり得よう。結局我々の行為は過去たとえば十五世紀末に生起したものの一環である筈で、従つて原因と結果に関する新しい体系なり方式を探究すること、また現代において推移する凡ては十五世紀末以来経過し来たものに依存する故に、我々はそれれ等の凡ての推移変遷を熟知することに大きな関心を寄せるわけであるといった調子である。^④

① ボアロー・デブレンオ (Boileau Despreaux: 1630-1711) はパリ生まれの詩人で且つ批評家或いはルイ十四世の史料編纂官。

② H. Butterfield, op. cit., pp. 140-1.

③ BOLLINGBROKE, Letter II.

④ J. R. Hale, op. cit., p. 46, 58.

四 Remarks on the History of England

① 所論客中心

実はポーリングブルックの Remarks on the History of England, 1730 (以降 Remarks と略記する) はマキアヴェリに負うところが大きい。重要な点は何故に彼がその政治科学の基本的構造なり主題を確立するために、マキアヴェリに依存したのであるかということである。この疑問に対する解答として直ちに考えられることは彼は『ローマ史論』と同様、政治的格言を引き出すのに歴史を利用しようと試みたと思われる点である——勿論歴史というものの性格なり特例の活用に関する彼の見解は『ローマ史論』に見られるそれ等とは若干異っていたことは事実であるが。実は Remarks は前掲の Letters on the Study and Use of History より早く著わされ、またそれはたとえばスチュアート家の諸王についての事例を挙げて、歴史の効用に関する一般的な原理の具体的例証を提供してくれるのであって、而も亦因果関係が一望のうちに把握されると共に、金言の多くが恰もマキアヴェリ風に展開するのである。即ち或る君主が自己の利益になるように国民の心を転向させて来た場合には、彼は必ずしもさらに特殊なすぐれた

人間を獲得しようと熱望する必要はないが、人心を反対の方向に変えてしまった場合には、それ等多くの人々と特殊なすぐれた若干の人々を引き離すために、なおまたその若干の人々を公的でなくむしろ私的利害の諸動機によって行動させるために、凡ゆる術策をも用いねばならないし、また時としてはマキアヴェリの格言がやや緩和された形で、たとえば民衆の親愛の情なり信頼をかち得るための第一の必須条件は、人民から恐れられもしなければ軽蔑もされぬことではないといふ調子で力説するのである。^①

さてポーリングブルックは Remarks のなかでイギリスの制度について述べ、ローマの政治機構即ち君主、貴族、民主政治の結合体が最善の形態であると称して立憲君主制の主題にとり組むのであるが、これまたマキアヴェリの恩恵を蒙っていると思われるであつて、それはまた一面ウォルポール家に対する一種痛烈な宣伝であつたとしても、他面彼の所論のアカデミックな面目を無視してはならないと思う。即ちポーリングブルックの論説はいわゆる政治科学と称し得るものの一局面に関する原理を体系化しようとの試みであり、同著の劈頭からの狙いはマキアヴェリとローマ史に関する明確な論議の開始である。たとえば彼はまずマキアヴェリが諸政体をつぎのように観察しているといふのである。即ち

マキアヴェリはまず政体の始源的原理について解説し、また凡ゆる政体は常に最善のものへと更新されるもので、如何なる政体も永続しない点に注目、その理由として如何なる政体といえども当初のプリンシプルのなかには若干の長所があったに相違ないことは明白で、さもなくば存続し得なかつたであろう。而もそれ等の長所はその過程において墮落退歩し、かくして政体の若干の部分に変化を生じ、また全機構を通じて発生する不均衡によって分解する傾向があるので、政体の健全性を維持し且つその生命を延長持続させる唯一のもつとも効果的な方法は、その政体当初の強力さと耐久力の基礎となつた諸原理に出来得る限り復帰させる必要がある云々と、このようなマキアヴェリの所論に対して、ポリーングブルックはたとえばマキアヴェリがローマの著名人達のヴィルトゥ(virtu)即ち人間力なり政治力によつてしばしば当初の原理に引き戻された幾多の実例を示しているのは自由の持続が自由の精神を温存しておく方法如何に依存するとか、或いはローマ政府の衰微なりローマにおける自由の腐敗についてもより詳細に論述しているが、マキアヴェリの垂流なり婉き直しにすぎないと言わざるを得ないのであって、彼の中心テーマは結局マキアヴェリから提供されており、彼が Remarks のなかで主張した視点は、恐らく若干の特例を通じ或いはそれ等によつてむしろ一般の真理

を裏証しようと試みたものと考えられるのである。というのはたとえば彼は第一に自由というものは一般に慎重さを欠いた人々によつては決して保持され得ないこと、第二に自由の精神は軽率さとか一般的な怒りとは遙かに異つたもので、たとえ最悪の君主に對してさえも寛容であり、自由それ自体他の如何なる精神よりも影響力をもつて最善のものを志向するものであり、第三に自由に對して懐疑的な時代には侵犯する支配者達には殆んど作用し得ないが、逆に自由の精神が極めて活動的であるならば、現在逆境に在つても早晚効果なり威力を発揮するに至る云々と論じていることから推論できる。

元來 Remarks の趣意は全体として時事問題的な内容であるが、同時にまたウォルポール時代の腐敗墮落を理由として反政府的な考え方なり論議を弁護しており、さらにはより広いカンパスで考案された彼の政治的思考のなかの主題ともなつたものであり、また同著はマキアヴェリの主要なテーマの一つである公的精神の腐敗即ちたとえば一國における自由の衰退の原因なり國家衰亡に關する論究である。彼は「Corruption」という語句独得の意味をマキアヴェリ流に直ちに社会と政治の不健全さ邪悪さと解したし、また自由が維持され得る条件の探究に當つてもマキアヴェリ式格言を発表している。即ち自由には危険がつきまとうもので、自由

を確保するためには常に嚴重な監視が必要であり、また如何なる法律や政令も自由の精神が旺盛でなければもはや効果的でなく、さらに自由の精神それ自体は善良な君主に味方して全力を尽すものであるが、而もそれは最悪のものに対してさえも緩慢に作用すると主張するのである。^⑥

ボーリングブルックはさらにテーマを拡大展開して近代史を活用している点が注目される。^⑦ そのなかで、彼は人民自身が自由の連帯責任者であるべきこと、また立法部を構成する野党の君主に対する譲歩というような行動は警戒の要があること、さらに時としてはマキアヴェリを引用して、自由な政府は自ら自由を保持するために自由の味方として日毎に若干の新たな準備施策を構ずべきであるとか、就中もつとも危険な政治家達は自由の外観を装うものであり、またもつとも偉大な君主達は自由の形態を遺すことが凡ゆる権力以上に彼等の抑圧の企図を達成するのにより有利であると考えていること、なおまた如何なる専制政治も議会との協力による権力行使には及ばないのであり、従つて考え方によつては無恥厚顔な君主の特権の影響といえども自由にとつて必ずしも極めて危険であるとは言ひ得ない。何故ならばその影響力たるやむしろ公開の公然たるものであり、而も実ば自由にとつてもっとも危険な攻撃は不意打ちなり秘密裡に不正な手段で損害を与

える攻撃であり、むしろ最善であつたものの悪化即ち腐敗墮落こそ最悪といふべきであると極力訴えているのであつて、マキアヴェリ派の命題と軌を一にする所論である。^⑧ 実ばマキアヴェリは一八世紀イギリス議会の腐敗墮落たとせば下院の自立性がいつしか侵害されつつあるとか、君主権の乱用に抗議した凡ての人々の味方として謂わばそのための戦術を準備し且つ亦皮肉にも彼等の政敵の兵器庫にも寄与したようなものであり、従つて時として彼でさえもホイッグ党の政治的伝統の支持者になつたとも言ひ得よう。

- ① H. Butterfield, op. cit., pp. 143-4.
- ② M. G. S. op. cit., SS. 306-12.
- ③ Bolingbroke, Letter XVII.
- ④ H. Butterfield, op. cit., pp. 146-7.
- ⑤ M. G. S. op. cit., SS. 63-67.
- ⑥ Bolingbroke, Letter XVII.
- ⑦ H. Butterfield, op. cit., pp. 147-8; Bolingbroke, Dissertations on Parties.
- ⑧ *ibid.*, p. 148; M. G. S. op. cit., SS. 67-75.

IV 五 The Idea of a Patriot King

① 所論を中心

ボーリングブルックに対するマキアヴェリの影響のクライマックスともいへるべき労作は先出の The Idea of a Patriot King,

1788 (以下 Patriot King と略記する) のなかに見られ、そこには政治的行動、反動、模倣、敵対などが直接的に深刻に描かれており、前記の如くマキアヴェリ『君主論』や『ローマ史論』を雛形にしたものである。^① というのは両者の著作は何れもその第一部は国家形態についての論議であり、政権は如何にして獲得せられ且つ維持せられるべきであるかということ、第二部は軍事問題と外交渉外の事務を取り扱っており、第三のセクションは人民および近親に対する国王の態度即ち国内問題や私的問題の研究である。ポーリングブルック自身も同著がマキアヴェリに由来することを認めており、また同著のみならず彼の諸著作中に出て来る国家における「腐敗墮落」や「公的精神の衰退」に関する究明なども、その背景は遠くマキアヴェリに依存すると思われる。たとえば彼はマキアヴェリが『ローマ史論』^②のなかで、人民が腐敗墮落に陥った場合にもし自由政府を享有したいなら、その政府は維持され得るか、果して新たに自由政府が創建され得るかなどの課題を取り扱い、結局何れも成功は困難であり否むしろ不可能であると断定し、さらに付加してもし可能であるとすれば君主政体の組織にすることであり、法律によって矯正できないほどに腐敗墮落した人々は君主専制権によって抑制され得るであろうと述べているのに対して、共鳴同調するのである。^③

ポーリングブルックはイギリスの一種苦悶の時代の主題に関して彼なりの信念を懐いていたようであるが、彼の巧妙なかけひきのために表面好んでそのような信念を気どつたにすぎないものか、或いはそのような確信は高邁な政治科学上の一試論として注目すべきであるか、何れにしても言い得ることは、とくに Patriot King の如きは国家としての当代イギリスが総体的に腐敗墮落に陥ってしまったとの見解を基調とした論説であることは否定できないであろう。彼が同論著よりも少し以前に記した The Spirit of Patriotism なども、このような事態に関する評価であり、恐らく彼は政友達でさえも正に愛国運動を裏切る準備を整えていたにすぎないことを彼なりに知悉していたと思われるのである。というのは政友達は彼等が野党時代にスローガンとしていた主義なり原理を、政権が近づくと喜んで放棄し去つたからであり、彼がかねて希望をつないでいた王党に対する失望は大きかったわけである。実は Patriot King は前記 The Spirit of Patriotism のなかで示唆された糸筋を辿ろうと意図された労作であり、腐敗墮落が当代に瀰漫していること、恐らく次代も亦同じ状態であろうと訴え、これこそ政治科学上の基本的な一課題であると論ずるのであるが、それは実はマキアヴェリが常に謂わば治癒の可能性を越えた解決し得ないものと考えていた問題でもある。^④ なお端的

に言えばボーリングブルックは政治的統一体である国家を通じて拡大した腐敗なり社会の道徳力を、徐々に蝕んで来た退廃をもちや必然のことと肯定しており、さらには彼によれば破滅から一國を救済再生させるには運不運は別として何等かの危機的事態が必要であり、そのような危機は火の情熱によって解消肅清されるであろうが、やがて国外からの危難や国内における諸々の破綻のため混乱が一般化するであろうし、かくして混乱から秩序が生まれるが、この秩序たるや正常な君主政治による秩序ではなく、むしろ不正な専制政治のそれであり、人民の腐敗墮落は増大する一方、結局は新しい法律や政策によって自由を保持することは絶対に不可能になるであろうという工合に、マキアヴェリ流の調子を続けやまないのである。^⑥

かくしてボーリングブルックが提出する課題は結局、一國の自由の保持に関するものであり、邪悪な専制君主が現われて公共の精神が地を払ってしまっている状態に在って、マキアヴェリと同様自由の復活という問題について苦悶し、彼に従えば本来私利私慾は俗事から生じて公事を汚すに至るもので、また君主のみが社会の再教育が可能であり、且つ亦腐敗墮落した人々をして善への認識を復活させ得るとなし、このような専制政治のチャンスを捉えて君主たる者即ち Patriot Kingこそは正に自己の権力を充実

させる契機を発見選択し得るとなすのであって、かくして問題は再びマキアヴェリの課題に帰するのである。即ち彼は君主に選択の自由がある場合、而も社会なり制度それ自体が内部的な腐敗によって解体に瀕している時、腐敗墮落した人々というものは恐らく自己の隸屬化を決定づけような諸政策であっても、それ等を支持することさえ敢えてなし得るからであると言るのである。^⑦

ボーリングブルックの思想大系の頂点を示す政治科学の論評である Patriot King の原形そのものは前述の如く『君主論』に追従する局面と若干『ローマ史論』的体系に基づくものであり、マキアヴェリの夥しい格言や回想が同論文の全構成のなかに包蔵されており、また同論著の一貫した主題なりアイデアの萌芽乃至原動力はマキアヴェリの政治的見識の不敵さに通ずる綱がある。而も重要な点はそれ等凡てのもの背後には明らかに反マキアヴェリの敵意が感ぜられる。というのは同論著着手の最初の意図は一方でマキアヴェリの著作との類似点を示すと同時に他面対立を示そうとして、たとえば題名をマキアヴェリの『君主論』に対してむしろ『愛國君主論』（即ち Patriot King）と称した位で、ともかくも偉大な先駆者との比較対照を試み、Patriot という単語に意味深長さを暗示したかに見えるのである。即ちボーリングブルックは同著の序言や本論でしばしば特異な Patriot King のイメ

ージを描出し、その協力なしにはこの物質的・道徳的世界の凡ゆる現象のなかでの救済はあり得ないとし、また一種永遠の奇蹟のような Patriot King のみが滅亡に瀕した国を救済することができると主張するのであって、事実また我々が一八世紀の単語なり用語の含蓄を理解するならば、Patriot King とは謂わば反対派に対して敢えて勝敗を挑む国王の意であり、またたしかに若干マキアヴェリに影響された倫理道徳観を荷負もうのであったと解してよいのではあるまいか。なおまたポーリングブルックにとって Patriotism とは Public spirit と同義語で、本物の Patriot King とは一種の制限君主であり、理性の命令に従って自己限定をなし、義務の意識に動かされるものであり、またたとえ一八世紀における Corruption という単語の意味をマキアヴェリが考えるよりもより広汎な弾力性のあるものと解しており、同様に前記の Patriotism とは単に時事問題的な字句ではなく、公共精神の保持とか欠乏衰退を研究する政治科学のなかの専門語と解釈したのであって、結局一八世紀における Patriot とは凡て公共精神の敵と認められたものを非難する人物を指し、たとえば政治的腐敗のゲームのなかでの金品贈与者と収賄者の双方を批判する人物のことである。

国家に対する国王の義務についてはポーリングブルックが *My Hot King* のなかで再三力説し、マキアヴェリ流のモデルに追

従して懸案の國家問題を取り扱っているわけで、彼は前記のようにまぎれもなく一種の制限君主政治の礼讃者であり、無制限な君主神聖権には反撥する。即ち悪政のための君主権の主張は不合理で神を冒瀆するものであるとし、君主権の制限それ自体が自由を確保するのに必要である限りにおいては実行されねばならないと論じ、また君主権の伝統なり歴史的背景に関しては、凡ゆる政治の究極の目的は人民の利益のためであり、人民にとって最大の利益は自由の保持であって、王位継承権によって即位する凡ての君主達は制限されることに同意する支配者であり、またその始祖と同様に法の權威によって規定された条件の元においてであると主張するのであるが、このような言明は少くともマキアヴェリの『君主論』のデスポチズムの指導精神なり政治的教訓とは相反する対照的見解ではあるまいか。^⑩

さてポーリングブルックは新國家の創建に当って、君主が自由制度か或いはむしろ専制政治の樹立を選ぶかというような難局に際しては、凡ては君主の誠意なり公共精神に依存するとし、またそのような高邁な目的を達成するには本物の愛国心が必要で、単なる見せかけのものであってはならないと主張し、マキアヴェリの体系の謂わば戦略上の一つの弱点なり裂け目に攻撃を加えるのである。即ちたとえばマキアヴェリは君主たる者は有徳の外観な

り世評を得る必要があり、而も自ら有徳の本質を備える必要はないと主張するが、これに対してボーリングブルックはマキアヴェリという人物は君主の政策の唯一の狙いとしての権力拡充の課題さらに領土支配権や人民の服従の問題を提示し、それ等の目的達成に資する凡ゆる手段を工夫推奨するが、而も義務や行動の道徳性または不道徳性に関しては少しも顧慮するところがないと非難し、とくに義務の觀念こそ政治における極めて重要な要素であるとし、力説するのであって、かくして彼の自己抑制に関する倫理道徳上の教訓と公共または自由の精神に関する政治上の教訓の両者は彼なりに結合するのである。¹³⁾

マキアヴェリは『ローマ史論』のなかで、彼が勧告した方法で権力を獲得した君主はさらに充実完成へ向って進むべきであり、また自由制度を打ち建てるために獲得した権力は出来得る限り行使すべきでない¹⁴⁾と提案するのであるが、ボーリングブルックの Patriot King の発想なり持導原理は結局あくまでも義務概念であると考えられるのであって、A patriot King はこそイギリスにおいては憲法および国民性の観点からも、常に絶対君主以上の権力を所有するであろうと繰りかえし論述する¹⁵⁾。勿論マキアヴェリも強大な君主権を強調するのであるが、ボーリングブルックはそれだけではなお不十分であると、義務觀念こそは如何なる私

利私慾をも超越して、現実¹⁶⁾に政治行動に関する論議を誘導する源泉たるべきであるとする。而も実はマキアヴェリは『ローマ史論』のなかで、ボーリングブルックのマキアヴェリ論評よりは遙かに深刻な表現で、もし人々が共和国の自由な制度を転覆して専制政治を樹立するならば、そのような人々は正に不名誉以外の何ものにも値しないと論じ、さらにマキアヴェリに従えば結局人々の眼前にそれぞれ異った二つのコースが展開し、その一は生存中安全を保証し死後は榮譽をもって追憶されるであろうコースと、その二は徒らに生涯を通じて人々に不安をもたらし死後も永く悪名高い人々にしてしまうにすぎないであろうコースである云々と¹⁶⁾。かくして実はマキアヴェリにとって義務の概念自体は結局現実には論議の対象にならなかったし、また倫理道徳的な目標に対してはむしろ無関心であったと思われる。というのはたとえば彼は邪悪の道を選ばず支配者に対しては極めて多くの格言を準備するが、有徳の君主に与える若干の金言のなかにボーリングブルックが Patriot King のなかで主張する見解に近似するものを見出し得るにすぎない。さらにマキアヴェリは専制的な支配者のための金言を用意する一方、他方では彼も亦或る意味で“A patriot King”の思想の実父ともなるのであって、彼がこの思想の生みの親であるということと彼が共和国の自由を創造しようとする理想、たと

えば『ローマ史論』のなかの「新国家を創造し自由制度を賦与する賢明で慈悲深い立法者」と相通するものがあり一致符合する。¹⁷⁾

而もとくに指摘したいのは、ボーリングブルックはむしろ支配者自身の義務観念なり純粹な公共精神を前提条件として、腐敗墮落した国の自由回復に関するマキアヴェリの方法を利用し得るのである。さらに換言すればボーリングブルックは倫理的論点が重大であることを是認した上で、国王のみが墮落した人民を救済し得るといふマキアヴェリの命題¹⁸⁾を応用することが可能であるとするのであって、このような方式は一見空想的というか一種の奇蹟に類するようであるが、ともかくもこのような考え方が一八世紀のイギリス政治史の展開に影響を与えずにはおかなかつたようである。

一八世紀のイギリスでは一応議會の形態が慎重に保持されたが、而もボーリングブルックの見解によれば、議會は腐敗墮落の実行や公共精神の衰退によって無価値化されたとし、マキアヴェリの原理を借用して本来一民族なり国民が一般的に腐敗した場合には新法律や政府の新政策によって自由を回復することは可能である故、法の精神なり新たな活気を人心に再注入する意欲に燃えた君主のみに期待し得るのであって、このような“A patriot King”が即位するや否や腐敗墮落は政治の方便であることを停

止するであろうし、かくして一種の万能薬が適用され、加うるに法の精神の復活に随伴して法秩序と組織が原型を再現し、マスクは剥がれ専制政治に対する真の防壁となるのであるが、“A patriot King”とは正に公共精神に精魂を打ちこんでいる国王のことであり、かりに彼が専制政治を創造し得たとしても、彼自身が自己制限という自発的行為によってむしろ自由の復活を選ぶ人間であり、腐敗墮落を排して議會のために公正な自由を回復し、Real barrier against arbitrary power になると論ずるのである。¹⁹⁾ 従

ってボーリングブルックは公共精神の奇蹟を求めつつあるわけで、而も彼の論議の焦点はやはりマキアヴェリの主題——たとえば国民が腐敗墮落してしまつた場合、利己主義と貪欲が社会公共の自由のための凡ての欲求を窒息させるようになり、君主の及ぶ限りの自己犠牲以外には自由制度の復活が不可能となる場合——の本質なり実体に関すると言わざるを得ないのである。²⁰⁾

実はボーリングブルックの死後一世紀を隔ててトリー反動の主役であるハノーヴァ家ジョージ三世が即位したころ、謂わゆる“A patriot King”のアイデアが一般化するようになり、

この新君主ジョージの敵が一種皮肉な言動を開始し、平和への期待に関してボーリングブルックの考え方や用語が復活し、たとえば自由選挙に好都合な法律および議會における汚職や委員占有を

防止する立法措置を構することによって、「議会の独立」を確保するようにとの強い要望が閣僚達に提示されるようになり、また下院は自由に行動し且つ閣僚に指令し得るなどのことが要請されるに至った。さらにまた政府というものは閣僚間の秘密のセンチによって動かされる機械ではなく、議会の権威を回復することが急務であり、「愛国者たる元首」は全面的に議会と協力すべきで、そのテストケースとして対仏平和条約の如きは議会で論議されるべきであると強く要望されるに至った。^④かくして実はペリ平和条約締結に際してホイッグは議会で一大論争を展開して同条約なりジョージ三世に反対しようと試みたが、これに対して国王は謂わば毒をもって毒を制する筆法で著名なヘンリー・フォックス(Henry Fox)をして下院における闘争運動を指導させたのであって、思えばこの対仏平和条約論争は一種の“A patriot King”としての能力の發揮を期待されていたかに見えるジョージ三世にとって不思議なめぐりあわせとも言ふべきものであった。というのは平和条約問題で勝利をおさめた後、ジョージ三世が侍従ビュート(Butte)伯の書簡に対する感謝の返書のなかで大略つぎのように述べている。即ち自分は平和樹立の暁には腐敗墮落を一掃するために親友たる貴下が支援してくれるであろうと確信していた。我々二人が死んだ後のことを考えると何と言つてよいであらうか。

平和条約が結ばれて貴下が廷臣となっても、閣僚の職は依然としてかつてと変らないことを恐れる。而して閣僚の悪徳故に革新の代りにこの国はより悪化するのではあるまいか。而もたとえ効果皆無でも、自分は不信心や貪欲を存分に攻撃したい。何故ならば閣僚達自身、邪悪と凡ゆる不名誉な手段で野望を最大限に達成しようとして試みるであらうからと。恐らくジョージ三世としては彼自身恰もメカニズムの囚人とも見えたであらうし、なおまた本来“A patriot King”というものはたとえ彼が少くとも腐敗墮落をもって腐敗墮落に抵抗することから自己を解放することが可能である前に、大いなる貫禄なり責任の持主であることが肝要であるが、而も実はジョージにしてもその政敵にしても、墮落した国民の間に自由を回復する使命を持つ“A patriot King”という概念の発想なり真の起源が外ならぬマキアヴェリその人に在るという事実、而もそれはマキアヴェリの直接路線としてイギリス史のなかにすでに浸透してしまつたという一大事実を知つた時に、双方ともに一驚したことは想像に難くないところである。^⑤

① 拙稿「ニコロ・マキアヴェリの思想に関する一考察」静岡大学教育学部、浜松分校『研究報告』第三集、昭和二十七年、一一九頁。

② M. G. S., op. cit., SS. 70-75.

③ H. Butterfield, op. cit., p. 150.

④ ibid., pp. 150-1.

- ⑤ D. Bush, *The Renaissance and English Humanism*, 1934, p. 36.
- ⑥ M. G. S., op. cit., SS. 143-6: 352-5: Bd. 2, SS. 101-5.
- ⑦ H. Butterfield, op. cit., pp. 151-2.
- ⑧ *ibid.*, pp. 153-4.
- ⑨ Walter Ludwig, *Lord Bolingbroke and die Aufklärung*, S. 172.
- ⑩ H. Butterfield, op. cit., p. 156.
- ⑪ 拙稿「前掲論文」三二六頁。
- ⑫ M. G. S., Bd. 2, SS. 70-3.
- ⑬ H. Butterfield, op. cit., pp. 157-8.
- ⑭ M. G. S., op. cit., SS. 314-6.
- ⑮ H. Butterfield, op. cit., p. 158.
- ⑯ M. G. S., op. cit., SS. 42-7.
- ⑰ *ibid.*, Bb. 1, SS. 39-47, 67-70.
- ⑱ *ibid.*, SS. 70-5, 409-11.
- ⑲ H. Butterfield, op. cit., pp. 160-1.
- ⑳ 拙稿「ルネサンス政治思想の系譜」『イタリア学会誌』第八号、一九六〇、一五一—七頁。
- ㉑ 一七六〇年には A letter addressed to two great men on the prospect of Reasons why the approaching Treaty of Peace should be debated in Parliament の(1760)ペンメントが刊行された。

- ㉒ John Stuart, 3rd Earl of Bute (1713-93) は後に首相となり、一七六三年、パリ条約で不評を買ひ引退しているが、その後も依然イギリス政界に重きをなした。なお国王の書簡は Prof. Namier, *England in the Age of American Revolution* の巻末にあり。
- ㉓ H. Butterfield, op. cit., pp. 104-5.

あとがき

以上拙稿は一八世紀のイギリス史を背景とし、微力ながらも、ばらホーリングブルックの思想とマキャヴェリの思想一般との関連に照明をあてて、具体的且つ試論的に比較論述して来た次第である。而して時として両者の見解に微妙なくい違いのあることは指摘した通りで、且つまた思うにマキャヴェリが究極においてむしろユートピア的であり、これに対してホーリングブルックがむしろ徹底的なりアリストであったとしても恰も両極は一致するが如くで、少くとも後者を敢えて前者の思想的後継者と断定して差しつかえないのではなからうかと思う次第である。

「付記」本稿は和昭三十九年度文部省科学研究費による各個研究「マキャヴェリ研究に関する史的考察」の一部である。

(静岡大学教授)

The Lineage of Machiavellism in England

—The Case of Bolingbroke—

by

Eiichi Shibayama

As an established fact, England from the end of the 17th to the first half of the 18th century was rising in the political and economical sphere by overwhelming France. On the other hand, it was the period of disturbing and stress like the period of Lorenzo de' Medici. In this period Bolingbroke's thought and movement in politics was constant or inconstant, and his thorough realism might be the very Machiavellism.

In this article, he was, though he was a disciple of Machiavelli, not a simple follower of Machiavellism, having a kind of philosopher's personality based on cognition and practice. We are to compare and examine his resemblance and difference of Machiavelli with a kind of Utopian trend; whether he was a convenient Machiavellist on his own principle.